



親の子離れ

小学校低学年で、子供が親と離れるのがつらくて登校を渋ったり、昇降口で泣いたりすることは、今も昔もよくあることです。そんな子供たちも、学校に慣れて不安がなくなり友達との時間を楽しめるようになるに連れて、いつの間にか何事もなかったかのように登校できるようになるものです。

しかし、これまでの私の長い教員経験を振り返ると、元気に学校に通えるようになって学年が進んだ後も、生活面や家庭学習などで、親に頼ってなかなか自立できない子供たちもいて、指導に苦慮することがありました。また、親（保護者）の子供に対する関わり方に起因する問題を感じることもありました。

私が学級担任だった25年ほど前はまだ、現在ほど「いじめ」問題はクローズアップされてはいませんが、当時から親が子供同士の人間関係（友達関係）に関心を持って学校と連携することは「いじめ防止」等の観点から大切だという認識は持っており、常に意識的に対応していました。そのような認識を保護者と共有しながら子供たちの成長を支えるために、担任として保護者と日々連絡を取り合い連携を図っていましたが、そんな中で、当時、私が受け持った学級や学年に、希にはありましたが、次のような保護者もいらっしゃいました。

- 日頃は子供の話を聞いたり触れ合ったりする時間をほとんど持っていないにも関わらず、子供からの被害情報にだけは過剰に反応する。（子供は寂しさから、被害を訴えれば親は自分の方を向いてくれると感じて、歪んだ言動が定着してしまいます。）
- 一方的、或いは断片的な情報を基にして感情的になり、子供に助言を与えて考えさせることをせずに、子供同士の関係に頻繁に介入する。（友達との対等な関係構築が困難になります。）
- 子供が興味関心を持ったことがあっても、まず否定した上で自分の価値観を押し付ける。
- 子供を所有物のように扱い、人格を否定している。
- 子供に対する「責任」や「愛情」を、「過干渉」や「過保護」「他への攻撃」という歪んだ形でしか表現できない。

私は以前、4世代同居のご家庭にお邪魔して夕飯をご馳走になったことがありました。その際、小学生にとって祖父である60代半ばの『息子』が台所でガスコンロに火を付けようとした際、曾祖母である80代後半の『母親』が「危ないからやめろ」と言って息子の手を振り払い、自分で火をつける姿を見たことがあります。立派に成長して、年をとり、孫ができて、母親にとっては、いつまでも「可愛くて」「心配な」息子なのだ、ほほえましく温かい気持ちになったことを鮮明に覚えています。

幼い頃から親としての責任を感じ、深い愛情を持って育ててきた子供が「いつまでも可愛い」「心配だ」と思う気持ちはよく分かります。しかし、そのような純粋な愛情と、子供の成長の足を引っ張ることにつながる偏りのある関わり方とは、別のものであります。

子供たち、特に幼い子供は、動物的な意味でも、保護者なしでは生きていけません。親の要求や期待、時には命令に従うことは、幼い子供にとっては、生きるために必須です。いつも世話をしてくれる親を信頼し愛情を感じて、「親が好き」と思う気持ちはもちろんあるでしょう。それと共に、立場の弱い子供には、「信頼」だけでなく、親に見放されたら生きていけないという「不安」もあり、常に親の顔色を窺っています。子供の成長を無視して、親が「責任」と「愛情」を間違った形で行使し続けてしまうと、子供は幼さから脱する機会を失い、あらゆる面で、「判断を親に委ねる」ことが常態化し、定着してしまいます。これは「子供が親離れできない」のではなく「親が子離れできない」ことによる弊害です。

毎日の登下校、学校での生活や人間関係、学習など、親としての「心配」は尽きることはないでしょうが、子供の「成長」を願い、将来の社会的な「自立」と「自律」を目指すために、小学生の親の姿勢として必要なのは、「目は離さず」しっかりと見守りながら、少しずつ「手を離していく」こと、子供に「自分で考えさせること」「自分でやらせること」「自分の判断で行動させること」です。

学校でも、この目的を保護者の皆様と共有し、心をつ一つにして、子供たち一人一人の発達段階や個性に応じてよく見極めながら、日々子供たちの成長を支えて参ります。

..... 切り取り線

学校への御意見・御要望・校長に知らせたいこと など

2022年4月28日（ ）年（ ）組 児童氏名